第 199 回企画展

酒田大火 40 年―つなぐ、炎の記憶―

開催期間：平成 28 年 10 月 29 日～平成 29 年 1 月 29 日

酒田と火災の歴史

酒田の火災史

風の強い酒田では、昔から何度も大きな火災に見舞われてきた。風のせいだけでなく、砂地の上に出来た町であるため、水利の便が悪かったことも原因だった。

明確な記録が残っている最も古い酒田の大火は、明暦 2 年(1656)の大火である。突抜(現在の二番町)から出火し、本町・中町から日和山下までの全町の過半を焼き、704 軒が焼失した。

『酒田市史・上巻』によると、明暦から幕末までの火事の発生頻度は、10 軒以上を焼く火事が 3 年に 1 回、100 軒以上が 5 年に 1 回、500 軒以上が 12 年に 1 回、1,000 軒以上が 40 年に 1 回、2,000 軒以上が 67 年に 1 回の割合で発生している。町が無くならなかったのが不思議なほどの数字である。

町民は防火力の強いタブノキを植えたり、高い塀を造るなどして火災に備えた。また風向きを意識した町の割り直しを行い、三十六人衆を中心に防火・消火態勢を整えて、火災に強い町づくりを行ってきた。

明治 27 年(1894)、酒田だけで 162 名もの死者を出した庄内地震が起こり、1,747 軒を焼く火災を引き起こしている。これを除けば、100 軒以上の大火は、弘化 2 年(1845)の大火(920 軒焼失)が一応の最後だった。火災が多い町だからこそ培ってきた高い防火意識で町を守ってきたといえるだろう。

酒田大火は、弘化 2 年の大火から 131 年後に起きた大火だった。

酒田大震真写図
酒田本町大激震
烈火中人民狼狽之図

庄内地震(明治 27 年／1894)で発生した火災の様子を描いた石版画。

江戸時代の酒田火災年表(500 軒以上焼失)

発 生 年	月　日	出火地	罹災軒数	風向き、被災区域、原因など
明暦 2(1656)	5/2	突　　抜	704	南東風。明暦の大火、清治郎火事ともいう。
宝永 4(1707)	12/8	猟 師 町	718	北西風。本町・肴町・片町
享保 11(1726)	5/8	片　　町	2,077	南東風。片町～日和山下。権九郎火事ともいう。
享保 12(1727)	4/12	上 ノ 山	700	落雷による出火。
享保 14(1729)	2/14	猟 師 町	700	放火による。犯人の女は処刑。
	9/15	和泉小路	806	
宝暦 1(1751)	3/29	荒 瀬 町	2,405	南東風。荒瀬町～日和山米置場・陣屋。宝暦の大火、豊後火事ともいう。
宝暦 8(1758)	7/13	伝 馬 町	1,479	北西風。
明和 9(1772)	4/15	片　　町	2,182	南東風。
寛政 5(1793)	10/1	染屋小路	945	
寛政 10(1798)	2/28	六軒小路	640	西風。秋田町、伝馬町、今町、寺町、大信寺、安祥寺、浄福寺、浄徳寺。
	4/30	新米屋町	590	
	10/1	染屋小路	671	南西風。本町、上中町、大工町、桶屋町、鍛冶町、肴町、桧物町、十王堂町、下内町、浜町、近江町、天正寺町、新片町。
文政 5(1822)	2/11	染屋小路	904	南西風。四ノ丁、三ノ丁、和泉小路、上ノ山、大工町、桶屋町、荒瀬町、近江町、堀切、新片町。
	12 月	出　　町	1,240	2度の大火に見舞われ、社寺焼失多し。詳細は不明。
弘化 2(1845)	4/20	淡路小路	920	南東風。内町、本町、台町。アマ鯛火事という。

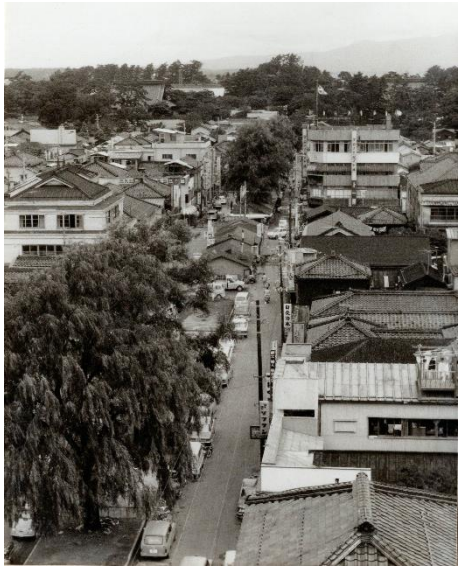
『酒田市史・上巻』酒田火災史年表をもとに作成

江戸期の酒田での主な防火対策

■防火帯の設置

明暦 2 年(1656)の大火後、南北への延焼を食い止めるため、山王堂町から秋田町にかけて(現在の一番町から中町)、防火帯として**松原地**を設けた。

宝暦 10 年(1760)には、利右衛門小路から寺町に至る間に、幅 10 間 3 尺(19m)の広小路を造った。その中央に掘割を造って防火用水を引き、掘割の両側に柳を植えた。現在の**柳小路**である。



昭和 40 年代の柳小路

■消防組織の整備

酒田では、寛永 9 年(1632)頃には、町方の消防組織ができていたと考えられる。これは江戸の「いろは組」といわれた 48 組の町火消し、鶴岡の町火消しが編成されるよりも早い。

安永 7 年(1778)の「火消方諸事定書覚」(伊東家文書)によると、火消し方は東組と西組に分かれ、さらに各町の割り当てが定められている。この頃には全町あげて消火活動が行われていたと考えられる。

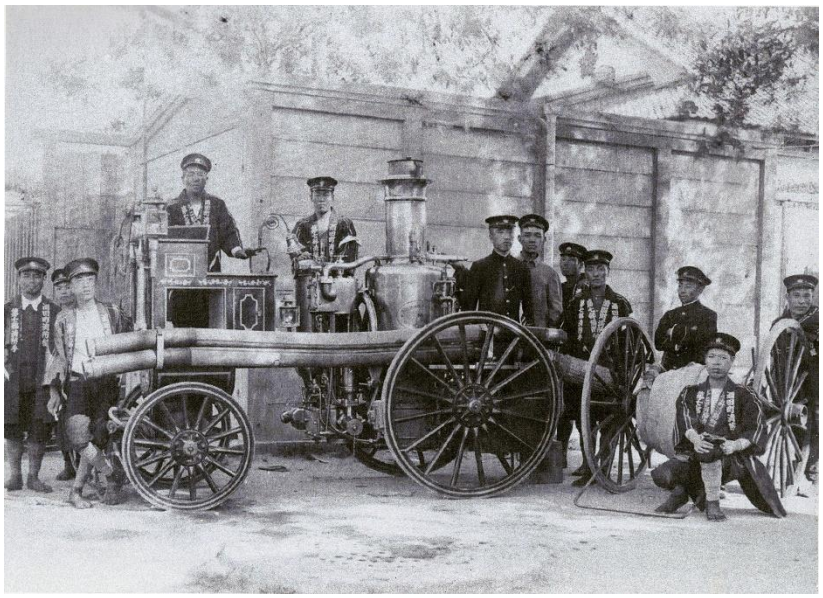
寛政 5 年(1793)からは三十六人衆も消防組織に加わり、万延元年(1860)には町を 31 組とし、総人数 1,424 人による消防組織が設けられた。

右：**龍吐水**　江戸期
左：**防火頭巾**　明治期以降

■民間の常設消防隊設置

文化 10 年(1813)、富豪・白崎五右衛門一恭が自家に常火消しを置いた。30 余人の火消しは、普段は自由に暮らし、火事が起こると各自火防器具を持って火事場に駆けつけた。

白崎は町内各所に貯水池を造成し、半鐘も寄付するなどして防火に貢献している。



第六分団の蒸気消防車

大正

本町警察署脇のポンプ小屋の前での本町組第六分団所属の蒸気消防車と団員。当時この消防車酒田唯一の最新式のもので、各火災場で威力を発揮した。

『目で見る酒田市史』より

浜田小学校火災

昭和 31 年(1956)5 月 12 日

酒田市立浜田小学校の校舎(昭和 11 年建設)は、原因不明の火災によって、講堂・体育館を残し全焼している。新校舎が完成するまでの間、児童は焼け残った講堂・体育館で授業を受けた。新校舎建設は急ピッチで進められ、昭和 32 年(1957)に完成した。

この火災が酒田大火以前に起きた最後の大規模火災であった。

大火前の中心商店街

昭和 47～49 年（1972～74）にアーケードが完成

▲中町商店街アーケード竣工式
昭和 47 年(1972)7 月 6 日開催

酒田の中心商店街としてにぎわってきた中町商店街に、昭和 47 年(1972)6 月 30 日、総工費 4,500 万円をかけてアーケードが完成した。

長さは、現在、本間病院がある通りから清水屋前の通り(歩行者用モール)までの 524m。歩道を覆う形の片側式アーケードだった。最終的には道路全体を覆う全蓋式アーケードを設置することを見据え、まずはその第一段階という位置づけだった。

アーケードには「光りのトンネル」というキャッチフレーズが付けられた。竣工式では華やかなパレードなどが催され、さらなる商店街の発展が期待された。

翌 48 年(1973)には、東側に隣接する旧大工町、同 49 年(1974)には旧桶屋町・鍛冶町にもアーケードが造られた。

このアーケードを猛火が駆け抜けたのは、それからわずか 2 年後のことだった。

グリーンハウスについて

▲グリーンハウス　昭和 50 年(1975)

酒田大火の火元になったのは、中町にあった映画館「**グリーンハウス**」である。

グリーンハウスは、明治末期に酒倉として建てられた建物だった。大正末期からは砂糖倉として使われ、昭和 23 年(1948)にダンスホールになったが、翌 24 年に洋画専門の映画館として改装・オープンした。

上映設備には惜しみなく投資したほか、座り心地にこだわった座席を備えたり、食事の出前もできる特別個室を設置するなど、全国でも先進的な映画館だった。併設の喫茶「緑館茶房」には文化人が集まり、映画そっちのけでコーヒーを楽しむ客も多かった。

昭和 30～40 年代の映画黄金期、酒田市内には 5 館の映画館があったが、グリーンハウスは興行収入の 3 分の 1 を上げる、最も観客動員の多い映画館だった。

昭和 38 年(1963)9 月に発行された「週刊朝日」に「港町の“世界一デラックス”映画館」と題した、映画評論家・淀川長治の記事が掲載され、全国的に有名になった。

時系列で見る酒田大火

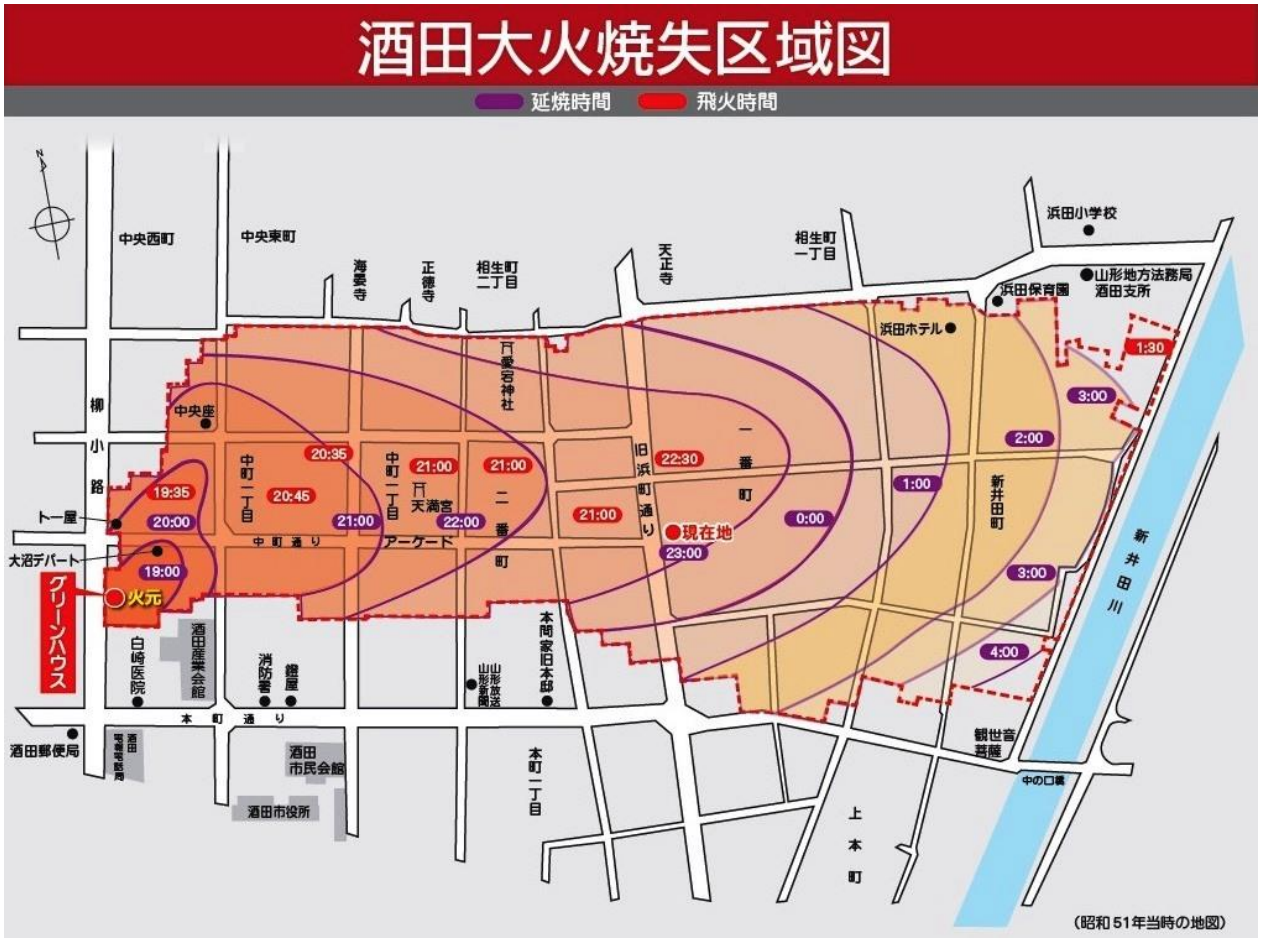
酒田大火

今から 40 年前の昭和 51 年(1976)10 月 29 日、酒田は繁華街を中心に 1,774 棟を焼失する火災に見舞われた。戦後まれに見る大火となったこの火事は、「酒田大火」として全国に知られている。

火事が発生したのは午後 5 時 50 分ころ。中町にあった映画館グリーンハウスから出火した。風速 25mを超える台風並みの強風にあおられた炎は、風下の商店街、住宅地など約 22.5ｈａを一夜にして焼き尽くした。

この大火による人的被害は、死者 1 人、負傷者 1,003 人、被災者 3,300 人。被害総額は 405 億円にのぼり、同年 11 月 24 日には激甚災害に指定された。

大火後の復興は急ピッチで進められ、2 年 6 カ月後の昭和 54 年(1979)5 月 19 日に開かれた「大火復興式典」で、復興宣言が行われた。



酒田大火の被害等の概要

・焼失棟数　1,774 棟 全焼 1,767 棟　　・焼失区域　22.5ha
　　半焼　7 棟

区　分			被　害
人的被害	死　者		1 人
	負傷者	重 症	10 人
		軽 傷	993 人
罹災世帯数			1,023 世帯
罹 災 者 数			3,300 人
被 害 総 額			405 億円

消防職員出動延人数		299 人
消 防 団 員 出動延人数	消 火	2,358 人
	整 理	5,591 人
自衛隊の災害救助派遣		2,504 人

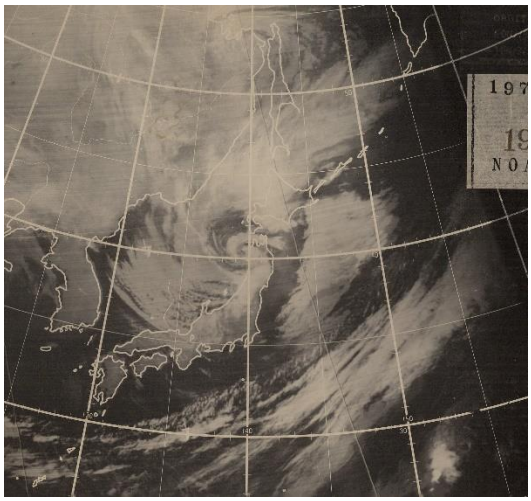
『酒田市大火の記録と復興への道』掲載
災害確定報告(昭和 51 年 12 月 20 日)より抜粋

大火当日の気象

10 月 29 日の山形県内は、冬型の気圧配置に覆われ、雨模様の寒い 1 日だった。酒田には前日の 28 日から風雨波浪注意報が発令されていた。火災現場に近かった消防本部の風向風速計は、火災発生から 1～2 時間後に破損しているが、破損直前の平均風速は **13m**、最大瞬間風速は **33.3m**を記録している。

この日、庄内各地では強風による被害が相次いだ。突風で飛ばされた屋根の木片が女性に当たってけがをしたほか、民家の屋根瓦が落ち、通行人 1 人が頭に軽いけがをした。酒田電報電話局では屋上にあった重さ 1ｔの古いパラボラアンテナ資材が飛ばされ、下に止めてあった乗用車 4 台の屋根が潰れている。

海沿いでは異常な高波が押し寄せ、タイ漁船、サバ漁船等 17 隻が大破し、その他小破した漁船を入れると 100 隻にも達する甚大な被害が発生した。



◀10 月 29 日の衛星画像

➢17 時 50 分　グリーンハウスから出火の通報

大火当時、グリーンハウスでは話題作だった「愛のコリーダ」を上映していたが、雨交じりの強風という悪天候のため、観客は 20 人前後しか入っていなかった。

最初に異変が認められたのは17時35分～40分頃。映写機のランプが消えたため、映写技師が対処して再開したが、何秒もしないうちにまた消え、火災報知機のサイレンが鳴りだした。ちょうど、ほかの従業員も、ボイラー室上方の廊下の電気がつかず、きな臭いにおいがしていることに気が付いた時だった。

ボイラー室から出火したと思った支配人、映写技師は消火に向かったが、濃煙にはばまれ断念している。他の従業員は避難誘導に当たった。

2 階事務室の方から「消防署に電話してくれ」という声を聞いた従業員が通報したのは 17 時 50 分だった。

ただちに出動した消防隊は館内に進入したが、急激に濃煙が渦を巻いて屋内での活動が不可能となったため、隣接する建物への延焼防止に当たった。

▲グリーンハウス

➢19 時ころ　大沼デパート延焼

グリーンハウスから出火した火災は、猛烈な火の粉を吹き出し、風に乗って酒田駅方面に飛んだ。その後、風向きは中町通りと平行に変わった。

炎は大沼デパートとてぶくろ横丁の間を抜け、大沼デパートに入った。東側の飾り窓の一部が加熱により破壊され、そこから火が侵入し、2、3 階の可燃物を焼き尽くしながら、上階に移ったと推測される。

5 階の西側及び東側の窓が破壊されたため、フロアを強風が吹き抜けた。このため炎と飛火が中町通りを越えて吹き出し、反対側の街区への延焼を助長させたと思われる。火は西寄りの風にあおられて拡大していった。

18 時 50 分頃に商店街が停電している。

▲大沼デパート

➢20 時ころ　内匠町通りに火が延びる

中町通りと内匠町通りの間にあった中町マートは、奥行きの長い 3 階建ての建物で、ほぼ南北に建てられていたため、一時的に火災の拡大を遅らせる働きをしていた。

しかし、いったんその中に炎が侵入してからは、建物の内部を走り抜けて、内匠町通りを越え、一部木造 3 階建ての映画館・中央座の軒下に延びた。

この頃を境に、火の玉、火の粉は浜田小学校の方向に飛散。中町一丁目の各所で飛火による延焼着火が発生した。

19 時 58 分に酒田市災害対策本部が設置され、20 時 15 時に避難場所が設置された。20 時 20 分には山形県災害対策本部が設置。20 時 30 分に自衛隊の派遣が要請されている。

▲21 時ころ　中央座

▲22 時ころ　好雅堂印舗

➢21 時ころ　炎がアーケードを走り抜ける

火災は、アーケードのある中町通りに添って進む一方、商店裏側の露出した可燃物を通じて拡大した。この頃には耐火建造物と消火活動だけでは止められないほどの勢いとなった。

大沼と家屋群から生じた炎と火の粉は、アーケードの上を走り抜け、燃えやすい家を選ぶように火がついていった。中町通りでは、先にアーケードの上を火が走り、下はそれより遅れて、二段構えで火が走ったと思われる。消火活動はアーケードが邪魔になって進まず、炎まで水を届けることができなかった。

一方、内匠町通りでは中央座が炎上し、炎と火の粉が走った。

▲24 時ころ　上内町付近より

▲1 時ころ　東急イン屋上より

➢22 時～23 時ころ　内匠町から浜町通りを越える

22 時頃、炎は中町通り、内匠町通りの 2 本の道路を強風によって走り、全面が火の海となっていった。この頃まで、火の流れは中町通りが先行し、勢いも強かった。

しかし 23 時頃になると、火の勢いが逆転。中町通りの炎は、耐火建築物が多い浜町通りに突き当たると勢いを弱めた。内匠町通りの炎は上り坂で勢いを増して、愛宕神社に至る。その勢いのまま浜町通りを越えて一番町、そして新井田町へ進んだと思われる。

勢いの弱まった中町通りの火も、これに引っ張られる形で同じ方向に合流した。

➢24 時ころ　破壊消防を開始

合流した火は、一番町、新井田町を燃やして新井田川に向かった。この頃から、火の玉、火の粉は新井田川を越え、東栄町、若浜町、緑町方面にまで飛散した。

災害対策本部では延焼を防ぐため、機械力を利用した破壊消防を行うことを決定し、市内の建設業者に協力出動を要請し、24 時から 30 日 2 時頃まで作業に当たった。

ブルドーザーは 10 台用意したが、使用したのは 1 台だった。内町交差点付近の 10 棟ほどの建物をブルドーザーで壊している。

▲24 時 30 分ころ　破壊消防

➢2 時ころ～5 時　水のカーテン作戦を実施、鎮火へ

火は新井田川に至り、一番町、新井田町は火の海になった。

消防隊は、新井田川を最後の防壁とするため、対岸堤防上に集結し、消防車数十台による直上放水で水膜を張る「水のカーテン作戦」を展開。飛来する火の粉を消火した。また後方一帯に消防隊と一般住民による飛火警戒態勢を整えた。

この頃から雨が激しくなり、3 時頃には新井田町周辺の火勢が衰えはじめ、4 時過ぎには対岸への延焼の危険はなくなった。

そして火災発生から 11 時間後の朝 5 時、ようやく鎮火に至った。

▲新井田川河畔より新井田町

各地からの応援

午後 5 時 50 分に通報を受けた消防署は、即座に火元へ出動した。同時に市内各地区から消防団も出動し、飛島（第 5 分団）を除いた第 1 分団～第 15 分団、約**1,747 名の団員が出動**した。各地の消防署・消防団も酒田に続々と集結し、応援消防車は合計で **86 台**にもなった。それでも、すさまじい勢いで燃える炎をおさえる事は出来なかった。

▲浜町通り

消火にあたった消防署員・消防団員らは、濃煙によって目を傷めるものが多く、病院で治療を受け、再度前線に復帰していった。

電力会社の活躍

10 月 29 日は、日中から強風のため、電線の断線と停電が相次いで発生していた。東北電力では修理などの対応に追われ、退社時刻になっても、多くの社員が職場に残っていた。そのような中で、酒田大火が発生した。

▲一番町の電柱トランス

東北電力では、停電の復旧作業も続けながら、火災の対応に当たった。社員が残っていたことが幸いし、出動はスムーズだった。

火災現場に赴いた社員は、電柱に登って、燃え始める直前まで耐え、被災地域だけのスイッチを切る作業を行った。そのため**被災区域の周辺では停電せず明かりがついていたので、市民の避難や消火活動の大きな助けとなった。**この作業は朝方まで続けられた。

▲荷物を背負い避難する住民

「訓練」として緊急出動した自衛隊

酒田大火では、神町、秋田、多賀城などの自衛隊駐屯地から部隊が派遣された。炎が燃えさかる中、延焼防止、避難誘導、家財等の搬出、応急救護などの救助活動を行い、鎮火後も 11 月 5 日まで焼け跡の道路から瓦礫を取り除く作業などに当たった。撤収するまでの 8 日間で、**延人員 13,492 人、車両 2,218 両、航空機 42 機**が出動している。

最初に出動したのは、神町駐屯地の第 20 普通科連隊だったが、この時点ではまだ山形県知事からの派遣要請を受けていなかった。しかし当時、第 6 師団長だった竹中義男さんが、19 時のテレビニュースで火事を知り、天候などの状況から緊急事態と判断。「**訓練**」として緊急招集をかけた。その後、酒田に向かう途中で派遣要請を受け、活動に当たった。

延焼を免れた本間家旧本邸

※本間家旧本邸：県指定文化財。本間家 3 代光丘が明和 5 年（1768）に新築した。

本間家旧本邸は、今回の大火で延焼境界線のぎりぎりに位置していたが、延焼を免れている。

外側はぐるりと土塀で囲まれており、塀の内側は母屋を取り巻くように土蔵などの耐火建物を配置している。大火当日に吹いた西北からの強風に対し、風上側に塀、次にそれより背が高い土蔵、次にさらに背が高いタブノキ、そしてそれらの風下に母屋という位置関係になっていた。塀・土蔵・樹木は階段状に並び、火の粉を上に吹き上げてブロックした。また、この常緑のタブノキの葉 1 枚 1 枚が火の粉を受け止め、最終防御の役割を果たしたのである。

このタブノキの機能は高く評価され、その後、酒田市では「タブノキ 1 本消防車 1 台」という掛け声で、小学校の周りから下水処理場の周りまでタブノキを中心に混植密植した。

また、その影響は遠く東京都荒川区に及び、町屋町会連合会では本間家の成功例にならい、街中でタブノキを植樹する取組みをスタートさせた。荒川区では、震災時に避難所となる学校等の区施設周辺や、一時避難所となる防災ひろばを中心に植樹している。

鎮火後の朝

10 月 30 日、夜が明け始め、所々にまだ火がくすぶるなか、かすかな明かりを頼りに被災者が戻ってきた。

当時、火災の原因・損害について調査し、自治省への報告書の作成提出を担当した消防職員の記録によると、焼け跡では時折、ドーンと鈍い音がして土蔵の壁が崩れ落ち、がれきの間から突き出したガス管から青白い炎が上がっていたという。

足の踏み場もない道路に焼け落ちた電線はクモの巣のようで、廃虚と化したビルと土蔵、アーケードの残骸だけが残り、まるで戦災の跡だと書いている。

朝 7 時には自衛隊による焼け跡の後片付けが始まった。

出火原因の特定

酒田警察署は出火場所、出火原因の特定のため、10 月 31 日から 11 月 3 日まで、グリーンハウス跡で現場検証を行い、関係者に対して事情聴取を行った。

調査の結果、天井裏付近の漏電の可能性が高いと考えられたが、焼損があまりにも激しく、配線がほとんど焼失していたことに加え、明治以来たびたび増築を重ねていたことにより、構造および配線を把握することが難しく、断定はできなかった。

▲グリーンハウスの焼け跡

出火場所、出火原因を特定する物的証拠や証言はいずれもなく、昭和 52 年(1977)5 月 4 日、以下のように推定の鑑定結果が発表された。

出火箇所　本屋西側と映写室の一部を含む天井裏付近と推定
出火原因　屋内電気配線系統からの出火の可能性が高い

▲産業会館屋上から見た中町方面

▲焼け跡を歩く市民の姿

支援と協力

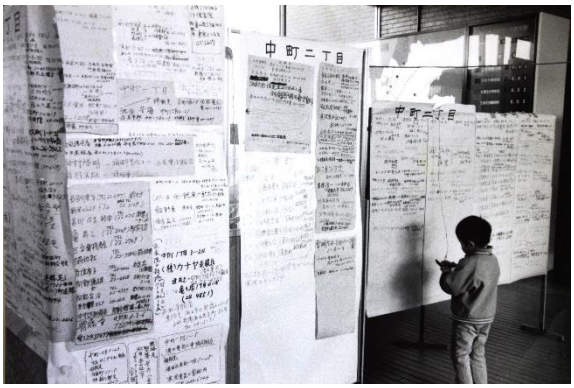
救援物資と義援金

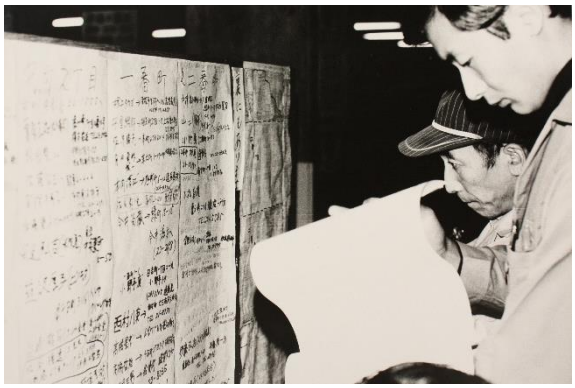
▲救援物資の仕分け作業

酒田大火が全国に報道されると、マスコミや各種団体、郵便局を通して、または直接市役所に全国から**義援金**や**物資**が次々と寄せられた。集まった義援金は昭和 52 年（1977）9 月 14 日までで、総額 797,422,115 円（**約 8 億円**）に上った。これらは膨大な量になり、月 2 回発行の酒田市広報紙に、毎号支援者の氏名を連載しても追い付かず、昭和 53 年（1978）3 月 1 日になって、ようやく昭和 51 年（1976）11 月 15 日受付分に至るほどであった。

救援物資の内訳は、食品・衣料品・寝具など様々で、これらの分類及び罹災者への配分は、周辺の町役場や市内の農協に依頼した。余剰となった救援物資はバザーで販売され、現金に換えられて納められている。

瓦礫の撤去作業を行う自衛隊員




罹災者名簿に見入る市民

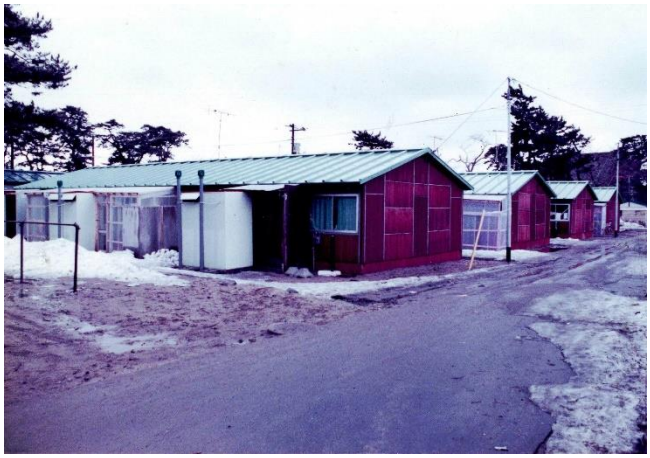
岸洋子酒田大火復興資金
チャリティコンサート
市民会館　昭和 52 年（1977）3 月 31 日
大火後、義援金募集で全国行脚の公演をし、収益金を酒田市に寄付した。

酒田大火お見舞い
チャリティ・コンサートチケット
東京 ABC ホール
昭和 51 年（1976）12 月

復興へ向かう街

応急仮設住宅の建設

応急仮設住宅は、中央公民館・浜田小学校校庭・若浜小学校校庭など、6 ヵ所に建設された。10 月 31 日までに、252 世帯からの入居希望申し込みが対策本部にあった。31 日の夕方までには建築資材が運び込まれ、11 月 1 日朝から仮設住宅建設に取り掛かった。15 日には中央公民館・浜田小学校校庭で建設が完了し、他地区の仮設住宅も続々と完成した。これらの仮設住宅には全部で 195 世帯が入居し、親せきや知人の家に避難していた被災者たちは、ようやく家族で過ごせる場に落ち着くことができた。



一方、若宮町に建設中であった県営・市営の一般公営住宅も、災害用公営住宅に切り替えられ、続々と被災者が入居した。

仮設店舗の開店

▲柳小路の仮設店舗
11 月 29 日引渡し

中町通りを中心として、商店街は甚大な被害を受けた。年末を前にして焼け出された被害商店主らは、「復興の第一歩は営業再開だ」として、仮設店舗の建設を決めた。法的には自分の土地に仮店舗を建設することができるが、焼け跡に個々の店舗を建てることは復興計画推進に大きな支障をきたすことになるため、市は商工会議所と計画し、共同仮設店舗を作ることにした。

建設場所は、復興計画に支障のない浜町通りや柳小路、海晏寺坂、本町市役所前などを指定し、11 月 11 日、建築確認申請を県に提出した。翌 12 日には庄内支庁から許可が下り、その日から酒田建設業協会の手によって着工された。

完成した仮設店舗は、柳小路に建設された 122 店舗を 11 月 29 日に引き渡し、浜町通りに建設された 58 店舗を 12 月 20 日に引き渡して、年末に向けた営業が開始された。しかし、その冬は連日猛吹雪に見舞われ、営業は予想よりも厳しいものとなった。

急ピッチで進めた区画整理事業

10 月 31 日の早朝から、建設省・山形県・庄内支庁建設部・酒田市都市計画課等により、国・県・市が一体となったプロジェクトチームが結成され、火災復興都市計画の本格的な策定作業が開始された。「防災都市づくり」を基本とし、「近代的な魅力ある商店街の形成」と「良好な住宅街の整備」を柱とした。同時に応急仮設住宅・仮設店舗の建設、焼け跡整理を進め、11 月 1 日の夜、防災都市づくりの計画概要の原案がほぼ完成した。復興計画の基本となる幹線道路については、将来の交通量を予測し、重要路線を四車線に拡幅する事で決まった。

区画整理事業の実施にあたっては、被災地での建築を制限した。これは、個人が独自で家を再建し、区画整理に影響を与える事を防ぐためである。建築基準法で制限できるのは 12 月 29 日までのため、11 月 8 日には相談所を開設し、急ぎ被災者の了解を得た。

火災復興は作業内容が膨大で、短期間に完了する必要があり、財政面・組織面でも酒田市の能力を超えるものがあった。そのため、11 月 18 日の酒田市臨時市議会で、大火復興の区画整理事業の県施行を要望する知事あての意見書が可決され、12 月 1 日に山形県酒田火災復興建設事務所が中央公民館に開設された。

これとは別に酒田市では、都市計画課内に一連の復興相談と県事務所との連絡役にあたる、復興建設係を新設した。

市民に希望をくれた甲子園出場

昭和 52 年(1977)の春、**酒田東高校**が第 49 回全国選抜高校野球大会に初出場した。

続いて夏には、**酒田工業高校**が第 59 回高校野球選手権大会に初出場を果たし、1 回戦で宮崎県の都城高校を 5 対 2 で破った。

両校野球部の健闘ぶりは市民に感動を与え、復興への励みとなった。

▲酒東野球部壮行会

焼け跡で開催した復興祈願山王祭

大火翌年の昭和 52 年(1977)、山王祭(現在の酒田まつり)の開催を自粛しようという声が上がった。

しかし、明治 27 年の(1894)の庄内地震の翌年や戦時中にも中断することなく、350 年以上続いてきた祭りであり、こんな時こそ神に祈るべきという意見も出され、「大火復興祈願」をテーマに行われた。

焼け跡に祭壇を組み、市長をはじめとした市の幹部が参列し、宮司が復興の祭文を読み上げた。焼け跡には露店がずらりと並び、例年に劣らないにぎわいを見せた。

復興宣言

復興宣言

大火から約 2 年半が経過した昭和 54 年（1979）5 月 19 日、市民会館で**大火復興式典**が開催された。市長と被災した浜田小学校の児童によって復興宣言が読み上げられると、被災者をはじめ多数の来賓と招待者によって埋め尽くされた会場から、大きな拍手がわき起こった。

式典は復興太鼓の音頭で幕を開け、伝統的な獅子舞、復興体操、被災園児のひまわりマーチ踊りのあと、大火の記録映像「炎の軌跡」の一部上映、防災の歌「明日に生きる酒田」の放送と続いた。

翌 20 日の酒田まつりは「復興まつり」として 17 万人の人で賑わった。今ではお馴染みとなった**ジャンボ獅子**は、この年に初登場し、今では祭りのシンボルとなっている。

▲酒田市大火復興式典

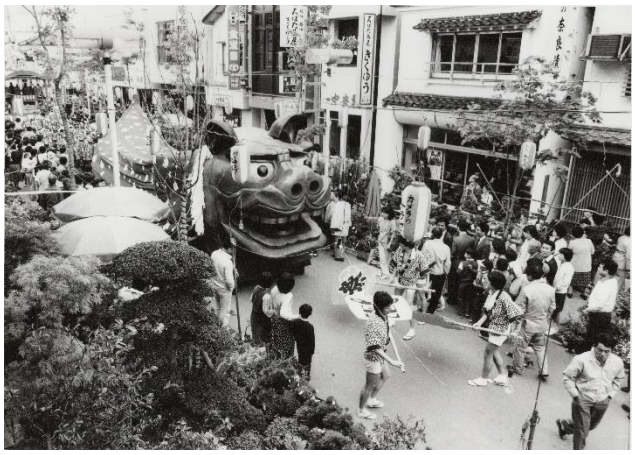
昭和 54 年（1979）5 月 19 日

市民会館

相馬市長と浜田小学校児童による復興宣言の様子。

◀酒田まつり

昭和 54 年（1979）



ジャンボ獅子

昭和 54 年（1979）

上下日枝神社の獅子頭を模した雌雄一対の赤と黒の獅子は、魔除けの郷土玩具として親しまれてきた。

大火後は、酒田の街から悪魔や不浄を祓い、二度と災厄が起こらず、安らかに発展することをうぶすなの日枝神社に祈り、大獅子頭を酒田のシンボルとした。

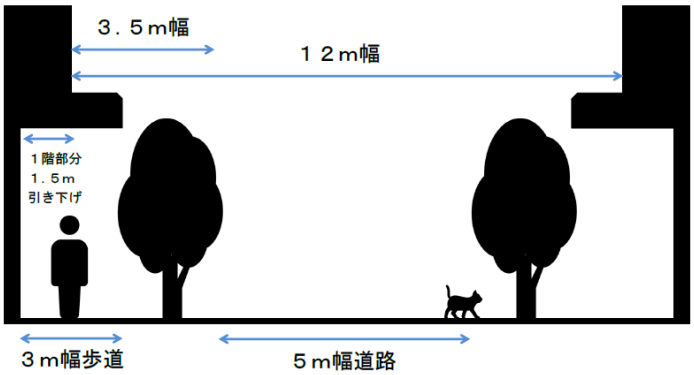
(参考：『続酒田ききあるき』　田村寛三著)

防災の塔「はばたき」

昭和 54 年(1979)、防災意識の高揚を図る事業に取り組んでいた酒田青年会議所が、大火復興地に造られた大通り緑地(資料館隣)に建てた。

同青年会議所では、事業の一環として「防災の歌　明日に生きる酒田」のレコードも製作した。防災の塔ができた当時は、大火が発生した時間帯にこの歌のメロディーを流していた。

セットバック方式の商店街



セットバック方式のアーケードとショッピングモール断面図（中通り）

商店街の設計にあたっては、従来のようなアーケードでは建設許可がおりなかったため、「セットバック方式」が検討された。セットバックとは、通りの店舗の 1 階部分を道路から引っ込めて、2 階部分が屋根がわりとなってアーケードの役割を果たすというもので、これであれば客が雨や雪を気にせずに買い物を楽しむことができる。しかし、1 階の商店にとっては売り場面積が縮小することになるため、計画は簡単には進まなかった。しかも、この計画は両側すべての店舗がセットバックを採用しなければ成立しないため、議論は沸騰した。

最終的に、中通りの店舗 1 階部分は市道から 1.5m引っ込めて、ひさしを 1.5m市道に出すことになり、その外側に 2mの緑地帯を設け、中央に 5mの道路を配置することになった。

復興した中通りショッピングモール

中町商店街は、セットバック方式のアーケードと街路樹を備えた歩行者専用道路のショッピングモールとして生まれ変わった。

現在の消防

最近の火災状況と防火

酒田管内では大火以降、火災は年々減少傾向にあり、昭和 50 年（1975）に 129 件だった火災発生件数は、平成 23 年（2011）には 36 件まで減少している。また、昨年も 38 件と少ない件数を維持した。これは、大火以降の市民の防火意識の向上があるのではないかと考えられる。しかし、旧酒田市管内だけを見ると、残念ながら平成 28 年（2016）の火災発生件数は、既に去年の発生件数を越えている。

これからの季節、ストーブなど火を扱う場面も増えるが、火を取り扱う際には「火のそばを離れない」という基本的な心がけが重要である。また、タコ足配線をしない、熱や火を扱う製品は正しい用法を守るなど、少しの注意で火事の危険を取り除くことができる。

酒田は強風の吹く日が多く、これまでも火災が風下側に大きく延焼した歴史が多くあるため、日頃の注意で火災を未然に防ぎ、二度と酒田大火のような火災が起きないよう、防災・防火を心掛けていかなければならない。

酒田大火 40 年
無火災祈念一斉放水
平成 28 年（2016）10 月 29 日
東栄町新井田川左岸

酒田大火の推定発生時刻の 17 時 40 分から 1 分間の一斉放水が行われた。